

◎正月の一日、元旦ともいう今日、6時に起きたが家族はまだまだ布団の中、いつも雑煮は屋前なのでその前に、「ちょっと描こうか」「ちょっと 運動に行こうか」なんて思案しながら。軽く何かを食べ洗濯物を干し自転車に乗って河原に向かった。昔のように運動着だけでは寒すぎる、普段とほとんど変わらないぐらいに着込んで出かける。若いころはパンツ一丁の上に薄いランニングズボン、Tシャツにジャンパー、走り出したらそのジャンパーも脱いで走っていた。それでも汗が出たが、何年か前からスピードが出なくなり、汗をかかなくなり、上も下も寒いだけで、「こらあアカン 恰好は悪いが 着込まない 風邪をひく 身体に悪い」と今のスタイルになってきた。

◎まだ9時、陽は出ているが朝の冷気が残っているので寒い。毛糸の手袋と帽子、フードを被り進んでいたが陽の当たる場所に出くると、ひなたぼっこの暖かさがジワリやってくる。永らく河原へやって来て走っている、もう30年以上になるのかな、勘定するのもわからなくなってきた。50歳代のころは10キロを1時間で走っていた、1時間走って簡単にストレッチをした。1時間走ると汗びっしょりになり帰ったら服を脱ぎ捨てシャワーを浴びた。ところが最近では走れない、足が宙に浮かない、「そらあ ジョギングじゃない ウォーキングだよ」と言われ、「くそお」と思ったが走れない。同じ年代のまわりの方が、マラソンやハーフマラソンや10キロレースと走っておられる。「オレも負けずに挑戦してみるか」「なんとかして走ってみよう」と走ってみた。「私は10キロ 1時間20分もかかった」「えええ オレは 1時間50分 こらあアカン」情けない話である。とはいえ去年は徐々に走れるようになってきた、「無理せず たまには スピードを出してみよう 走ってみよう」と思うが、タイムははかばかしくない、面白くない、ただしんどいだけである。そんなこんなで、「いやまてよ 無理して走らなくていい 今のように早足で歩くのがいい これが最高に身体にいい」と思うようになった。今は、ただじっくり歩いている、早足で歩いている、身体に負担がかからずしかも毎日歩ける、オレの運動法は、健康法はこれだね。

◎絵の話、毎日朝方は楽しく描いている。4日前に30号の新作ができ上がった。まっ白のキャンバスにまずは黄色い絵の具で描いてみた。次に緑色の絵具で描いてみた。いくつか色を入れ、次の青色が勝負色、「さあ 入れるぞ」と絵の具を塗り込んだ。絵の具が乾き立って掛け絵を見て、「アカン ちがうなあ まだだ」と悲観気味に眺め日が経っていった。その日、絵を眺めて、「・・・」青い絵の具をカップにたっぷり入れ筆で緩めて絵の具を混ぜていく、「よし 塗ってみる 細い筆で 絵の具を置くように 置く」細い筆でぐにゅぐにゅ まだ足りないね、ぐにゅぐにゅ、まだだね、ぐにゅぐにゅ、おお、いけているかな、まだかな・・・塗り終わった時に、「おおお いけた おわった これでよし」である。絵を描いていて、頭がぼうっとなり、「おおお いけた」と思う時はできあがる時である、美の神様が降り立ってくれる、「よし」といつてくれる、いい感じの時だ。大晦日の日にも緑の絵ができあがった。これは5年前の絵、緑色の絵、ササッと描いてサインも入っている、「ちょっと物足りない 緑色が浅い・・・」と画面をいらい、しばらくほおっていたが、もう少し緑色を入れてみよう、オレの好きなあの緑色を少しゆるめに溶いてかき混ぜ、筆で掃いてみた、飛ばしてみた、1回2回3回、「おお いいじゃない」 これまた美の神様が微笑んでくれた。二回も続けて彼女が表れほほ笑んでくれるのも久しぶりのこと、うれしい限りである。

◎土手の上を、「もうすぐ終点」と走っていた。正月の花を持った白髪頭の夫婦が下の河川敷を近づいてきた。「正月の花を持って帰るのかな」と思っていたがお二人はそこで止まって、花を挿した。そこには10年来鉄の手すりに花瓶が結わえられている。もう10年以上前になるか、下水道の排出口のところで30歳代のあんちゃんの死体があったらしい。どこかで殺されこんな不便なところまで運んで遺棄したらしい。「どなたか事情を知りませんか」というメモが何年も張り替えられていたが、その後犯人が捕まったかどうかそれは知らない。白髪の夫婦は多分あんちゃんのご両親と思われるが、花を生け、缶を開け、タバコに火を点け佇んでおられた。

◎正月の二日、「ちょっとポンポン山へ」ということで歩いている。本山寺の駐車場で 500 円を払って歩き出した。実は先日買った新品の登山靴：シリオの試着を兼ね歩いている。2.3 時間の山行、しかも新品の靴には優しい道、一度試着をしてみないといざ本番で足が痛いのはつらいものね。結果、百点満点であった。この靴を選んだロッジのベテラン店員はさすがである。

◎本山寺は相当昔、平安時代とか室町時代にできた寺ではないのかな。麓の神峰山寺から舗装された道があるが、この道はまだできて 50 年ぐらいじゃないのかな。資料によると、えんのおづね：役小角が創建したというから飛鳥時代までさかのぼるかも知れない。せっかくの新品の靴、舗装道路を歩くのは抵抗があるのでその横にある旧の参道、今は鄙び登山道になっているようなところをへエ～へエ～言いながら登った。

◎ああ、まもなくてっぺん。寒い、冷気がヒヤリ、この季節なりの寒さ。雪が降るともっと寒い、ここも雪が降らなくなったね。空は雲ひとつないがボケ気味の青空、常緑広葉樹の葉が陽の光を通してさまざまな緑にキラキラ光る。ここのてっぺんには温度計がある、あと 10 歩、ちょっと待ちねえ、ほほほ、おお 6 度だよ。てっぺんには 10 人ぐらいの人がいる、もう食事をしている、皆さんそれぞれ腰かけて早い目の昼飯だ。

◎山の中のりっぱなお寺、山の中と言っても登山スタイルの我々が 2 時間 3 時間かけて、ひ～ひ～登るような山のてっぺんに、本格的な寺院建築をいくつか見た。これはどうやって作るのだと不思議に思う。大木や巨石を上を持ち上げる、と簡単に言うけれど大量のそれらの資材を、コロの作用、テコの作用、というのが気の遠くなるような人海戦術があったのかな。山は材木には事欠かないので、それを使ったのかなと思ったが、違うらしく、各地から立派な木を調達したらしい。長い距離を運ばれた末、コロやササを地面に敷き、エンヤコラひっぱり上げたとか、材木も石も瓦も運び上げたのだろうね。

最近の林業作業を見ると、まず山の斜面に重機が入ってトラックが通れるような林道を作り、重機で木の伐採、枝はらい、トラックに積み込んで麓へ運ぶ。跡地には新芽が植えられ養生されたひょうろり細い木が 5 年 10 年と育っていく。

◎古代の大工事なんて検索すると、“出雲大社”“仁徳天皇陵”のふたつが出てきた、というよりこの二つ、オレ自身、興味があって以前調べていたものが、またもや出てきただけかもしれない。ネットの怖いところのひとつが、ひとつたび見ると、次から次同じ内容のものが出てくる。知らない人はこれが普通になってしまうが、世のなかにはいくつもの意見や事象があり、このライン、この方向だけではないとわかっていても、同じタイプのもものが次々出てくると、世のなか全部がこの方向だと洗脳されてしまうのが怖い。と話がそれたが、出雲大社の古代の社は、高さが 40 メートル級であったとか、仁徳天皇陵は世界一の面積で、あれを造るのに 2000 人で 13 年の月日がかかるという計算になるらしい。中東のピラミッドも人海戦術で工法は、工期はというのが議論されていたと思う。余談だが、仁徳天皇陵の解説の中で、「今は遺跡を掘ることができないが 将来もっとすごい技術が現れ 掘らなくても全てがわかってしまう ということがあるかも知れない それを考えると今掘ることはない 今掘ってしまうと 将来調べられない」もう一つの余談は、「仁徳古墳時代には 記録がない 中国で何百年か後に書かれた記録に 当時の日本には 五王が居た」と書かれているのを見て、それを基に仁徳と決めたらしい、というあやふやな話でもあるらしい。

◎ポンポン山にも、「クマに注意」の貼り紙がいくつも目立つ。最近各地の山で、熊を見たという話をよく聞く。「なにを言うか ○○市街で出たらしいぞ」という人もいる。オレは今のところ間近でお目にかかったことはない、幸いなことだが、ばったり遭遇すると怖いと聞いている。

◎今日は中山さん（中山寺の上にある山）に行く予定だったけど中止になって、「近所でも 歩いてみよう そうだ 安威川ダムでも 行ってみるか」と自転車で出かけた。いつもの安威川河原を、ちょっと出発点を変え耳原の遊歩道終点辺りに自転車を止めて歩き出した。オレのいつもの悪い癖で、「こう行けば 行けるだろう」と全くあたらない勘を頼りに歩き始めたが、右往左往するだけでなかなか阿武山の方に近づかない。30 分ぐらいで行けるところを、間違って引き返してなんとか阿武山古墳の方にやって来た。この悪い癖は街を歩く時と車運転の時にしてしまう。頭の中に地図ができていて、「こう行けば 行けるはずさ」と行ってしまうが、この頭の中の地図が狂っているので目的地にたどり着かない。地図が狂っていることがわかったのはまだ最近の事、それまでは、まさかオレが“地図の読めない男”とは思っていなかった。人生ひっくり返るほどの驚きである。山ではスマホを持つ 2 年前までは、必ず紙の地図を持って歩いていた。地図を持つ山の中で“現在地”がわからないと手のつけようがない。地図を見て“地形を把握する”“現在地がわかる”てなことをマスターしなければと時々読図の動画を見ている。

◎オレが茨木に住み始めたころは、家の方から阿武山の地震観測所がいつも見えた。山の中腹に白い塔が立ち、あれがその建物だと知っていた。それから 10 年も経つと茨木がどんどん変化し、たちまち田んぼが消えて大きな建物が増え、地震観測所の塔もどこか高いところに行かないと見えなくなってきた。塔の中には振り子があって、自身が起こるとふらふら揺れる、なんて原始的な装置があるんじゃないかなと想像するが、ほとんど使っていない様子だ。

◎塔のことを検索すると、京都大学の能書きページが出てきた。少年時代麓から見てみると、単に塔だと思っていたが、なかなか立派な建物で建築遺産にもなっているらしい。能書きでは地震に関して、なかなか研究成果も上がったと言う。そのついでに阿武山古墳の話も出てくる。当時、この地震計建設関連工事で、坑道を掘っていて、偶然に石室を発見、その中に漆塗りの棺があり貴人のミイラが現れた。当時の最新写真技術で写真を撮り、「不敬にあたる」としてすぐ埋め戻しその写真も奥に収納されたままになっていた。その写真が何十年後に発見され、現代技術で再生するときらびやかな装飾品やら、貴人の人骨等が浮かび上がり、「これは 藤原鎌足」と騒がれた。このことは当時大きなニュースになっていたのを思い出す。考古学的には藤原鎌足とは決定していないようだ。

◎3 時頃から歩きだし、阿武山山頂に来たのが 4 時ころ、「安威川ダムまで 1 キロ」の標識に沿って歩いたが照葉樹林帯の樹々に阻まれダムもダム湖も安威川も流れも見えない。これは時間切れだと引き返した。ダム建設当初は、「ダムができると 安威川が 汚れるかな」と思い、「なんでダムなんか 造らなくてもいいんじゃないの 土建屋が儲かるだけ 地権者が儲かるだけ」と思っていた。今もダムに関して、「なくてもいいんじゃないの」と思っているが、安威川上流部分は自然の山だけだったのが、土地が大きな面積掘り返され、道路ができ、将来建造物が立ち始め副都心になっていくような気がする。もうここまで来ると、良いのか悪いのか判断がつきかねる。オレが登る山はこういうことになっていくのは嫌だねえ。

◎御神木と書いてある、どの樹の事かなと見ると、クヌギか何か株たちの樹だ。昔、炭を作るためにいいかげんな大きになると伐り、また何年かして伐りという樹が、もう炭を作らなくなって何十年、20 本ぐらいに幹分かれしてによきによき大きく上に伸びている。50 年 60 年によきによきである。よその山の御神木は立派な一本の樹、まわりを睥睨して、「俺様がいるぞ」と仁王立ちしているが・・・とバカにすることはないじゃないの。よそは他所、こいつは阿武山に登る善男善女が親しみ崇め格好良く立っているのだから・・・。

◎株立ち：調べると、伐採された木の根元から立ち上がる：萌芽更新：藁（ひこばえ）という。株立ちは幹が細く材木としては利用しにくい、昔の薪炭用以外に、果樹や花木で手入れがしやすい、庭木に利用すると格好がいい・・・。

◎この阿武山、毎日のように登ってくる人たちがいて、ベンチを作り弁当を広げ団欒をしているようだ。ポンポン山も同じように毎日のように登ってくる人がいて、阿武会とかポンポン会とかあるんじゃないのかな。

- ◎ミツマタの街道があると去年教わって歩いた。ミツマタの花があんなにいい感じのものだとは知らなかった。初めて見たのが5年くらい前、大嶺奥駆道の“前鬼”入り口だった。「おお なかなかいい感じだねえ」とその時思った。ひろみさんが、「天王山にも ミツマタ街道 あるよ」と連れられて行った。「天王山に そんな所あったかな」と訝っていたが、たまたま天王山山頂で会った方が、「知ってますよ 今からそちら方面に行きますので 付いてきてください」とおっしゃる。あとから考えると、ミツマタ街道を作っているのが、サントリーで、その人はそこの方だったような気がする。酒解神社から登山道を下るのではなくまっすぐ下り、グニュグニュ説明のできない道を行くとクリーム色の花を付けた木があった。「おお これは 街道だ」と気に入った。そのあと、背をかがめて通るような線路下のトンネルを抜けて JR 山崎駅に行った。ところがそのトンネルが見つからない、「今日は あのトンネルをもう一度 探しましょう」と歩いた。「あ この路地と違うかな」と行くとそのトンネルはあった。そのトンネルをくぐり、山側にある幼稚園あたりから坂を上っていく。「そうそうこんな雰囲気だった」それこそ説明のできないようなグニュグニュを上がって行き、タケノコ山の道を歩いていく。「おお ここだ もう小さい蕾を付けている クリーム色の花が咲こうか 咲くまいか」というたたずまい。ミツマタが咲く3月ころにはその街道を整備して人が楽しめるようにするのは、今はまだ泥んこ道に草は生え歩きにくい。
- ◎酒解神社：自玉手祭来酒解神社くたまでよりまつりきたるさかとけ：創建714年とは古い：重文＞ミツマタを過ぎるとこの建物が現れる。鄙びた山の上に崩壊まではいかないが一部崩れかけた立派な社がある、国の重文で、厚板造りは珍しいそうだ。拝殿の前に舞台があり、かつてここで舞楽が舞われていたのではと想わせる。まだ正月が過ぎたばかりの今、建物にはしめ縄が巻かれ、白い紙：紙垂がひらひら舞っている。天王山は370Mの低い山なれど戦国時代の陣取り合戦で有名だ。
- ◎南東の方向下界を見下ろすと淀川の三川合流が見え、対岸は住宅が斜面に沿って並び、「あの上が 石清水八幡宮だね」「下の住宅が 男山」「あれれ 男山？」「友人が 楠葉に住むが そこも男山・・・」調べると対岸の京阪電車は橋本駅、大阪に向かう次の駅が楠葉駅、石清水八幡宮駅は東に回り込んで見えないようだ。男山という地名は橋本から楠葉まで長いようだ。
- ◎柳谷観音から、大沢と書いてある道を選んだが、カントリークラブの道に出てしまい、毎度のように迷ってしまった、情けないねえ。大沢というのはこのあたり一帯の地名のようで、大沢の杉もあれば遠く離れた大沢峠もある。行きたかったのは大沢峠だと思いながらも、先日歩いた舗装の道を歩きポンポン山を目指した。青空が出て快晴ながら空気は冷たい。この寒さでは手袋はいらないと思うが、防寒ジャンパーは着たままである、ニット帽は離せない。人それぞれで、帽子はいらないが手袋が欲しいと相棒が言う。
- ◎小さい水溜まり、「あれれ 凍おってる 分厚いぞ」横の川、砂防ダムの水も凍おっている、やはり山の中は里山とはいえ寒いんだ。先ほどもワッセ登りきったところで弁当を広げた。汗をかくぐらいに身体が火照っていたがすぐに冷えてきた。ダウンを出して着ようかと考えながらも、じゃまくさいと、我慢してすぐに歩いた。
- ◎途中の休憩所のベンチの横の温度計が5度である。ちょっとと、ザックから固形の行動食を出した。このての行動食、ビスケットのようなものが多いが、長らくザックに入っていたので粉々になっている、袋を開け上から口にほおりこむ、水をゴクリ、このての行動食はハイカロリーをうたっているが、美味くない、不味いである。先日水が足らなかったのて1リットルのスポーツ飲料と熱い湯と茶を持ってきたが、身体が火照ると冷たい水が美味い。そのくせ冷気が走るのですぐに小便が出る、ごめんちゃい。
- ◎4時15分前に JR 山崎駅付近に降りてきた。ほぼ7時間のうろうろだ。いろいろ山に行くが、駅を降りてすぐが坂道、すぐに登山開始というところは珍しい。ほとんどの山が電車を降り、バスに乗り換え1時間ほど走るとか、徒歩で1時間以上歩いたところが登山口という山が多い。車で山に入ると登山口まで楽ちんで行けるが、下山は車の場所に戻らないといけな、電車から降りすぐに登山口という山はすこぶる楽ちんである。電車なら、大回りして他所の場所に下山する手もある。ソロ山もいいが、気の合った仲間との山もいい。

相撲人成村常世勝負語 23-25<すまひびと なりむらつねよ と しょうぶ すること>

◎左の最手（ほて）真髪成村、右の最手の海恒世（あまのつねよ）が王者をかけて激突した。

◎名を惜しむ老相撲成村の追いつめられた心情、後輩の恒世の精神的ゆとりが、各人の行動を通じてよく描かれている。勝った恒世が傷ついて死に、負けた成村は引退して凶刀に倒れる。不吉な取り組みとして、以後、最手同士の対決が禁じられたほどである。

◎最手：もて：相撲において、天皇に召しだされた相撲人（すまいびと）の最高位。現在でいう、大関・関脇の地位にあり一番の実力者、現在の横綱に相当か。実力が劣るものは、脇・最手脇と呼ばれた。

江戸時代、谷風梶之助・小野川喜三郎の二人が、吉田司家より横綱免許を受けた。それ以後も横綱はその免許を受けたが、現在は日本相撲協会に譲られた。

◎古事記や日本書記に、“のみのすくね”と“たいまのけはや”の力比べの神話が出ている。

◎現代相撲は、横綱同士が対戦する、これは当たり前のことだが、この当時、どちらかが負けると面子丸つぶれとでもいうのか、千年前の人の気持ちや常識はどうも違うようである。

◎オレは、「巨人・大鵬・卵焼き」世代である。知らない人のために解説すると、その昔、世間でおお流行した言葉だが、野球の巨人軍、相撲の大鵬関、高価で最高の御馳走である卵焼き、この三つがもてはやされた。オレも大鵬関が好きだった、白系ロシアの血を引く大鵬は甘いマスクで強かった。この歳になって柏戸関のことが気になる、大鵬のライバルだったが星は負けが続いた。大鵬が居なければもっとすごい横綱としてもてはやされたのではと思う。

◎今は昔、円融天皇の時代、永観二年の七月〇日に、堀川院で相撲の節会が行われた。

さて、選抜試合の当日、左の最手である真髪成村と右の最手である海恒世が呼び出されて取り組むことになった。成村は常陸国の相撲人であり、村上天皇の御時以来、相撲を取り続けて最手にまでなったもので、体格も力も抜群であった。恒世は丹後国の相撲人である。これも村上天皇の御代の末頃から出てきて取り続け、最手にまでなったもので、体格は成村より少し劣っているが、技は実に上手であった。今日、取り組まれたなら、二人とも長い間互いに好敵手をもって任じている者同士であるから、この勝負は両者いずれにとっても非常に気の毒な結果をもたらすに違いない。まして成村は恒世より相撲歴の長いものだから、もし負けたなら、本当に気の毒なことであろう。

さて、取り組む段になって、成村は六度まで免除を申し出た。恒世も免除こそ申し出ないが、成村は俺よりずっと先輩だから、すぐに取り組むのも気の毒ことと思われ、しいて勝負したいと思わず、また、相手も非常に力が強いから取り組んでもそう簡単に勝てそうにない。そこで、成村が六度まで免除を申し出てわきにはなれる度ごとに、恒世は放してやった。七度目になり、成村は泣きながら、また免除を申し出たがゆるされない。成村は怒気を含んで立ち上がるや、がむしゃらに寄って行き、組み合った。恒世は片手を首にまわし、いま片手でわきをさしにいった。成村は前袋を引き、よこみつを取って、恒世の胸に胸を押し付け、しゃにむに引き付けるので、成村は小声で、「気が狂われたか いったいどうなさるおつもりじゃ」と言ったが、成村は耳もかさず、強くひきつけ、外掛けをかけようとする。それを待って逆に内掛けにからみ、のしかかるように体をあずけて浴びせ倒すと、成村はあおむけになって倒れ、その上に折り重なるように、恒世が横ざまに倒れかかった。

◎当時、相撲の勝った方が、手を叩いて笑う、という風習だったらしい。ところが物言いがつき、盛んにもめ、日が暮れてしまった。成村は起き上がったが、恒世は倒れたままである。

◎恒世は褒美の着物をたくさんもらったが、着ることもできず、播磨国で死んでしまった。

◎成村は、「恥をかいた」とその後京には上がらず、10年後に敵に打たれて死んだ。

◎山に登る時は行動おやつに、オレのお手製パンをひと口大にカット、干しブドウとチョコレートのかけらを袋に入れて持っていく。いつも言うが、お手製のパンは非常に美味しいというわけではないが、やめられない美味さがある、まことに魅力的であると自賛。オレはいつも腹を減らしている、もういい加減ジジイになってきているが、山を歩くと腹が減る、腹が減るとガス欠になって冷や汗が出、動きが止まってしまう。要するに燃費の非常に悪い体質のようである。袋に手を突っ込み、パンを、ブドウを、チョコを、ポリポリつまみながら歩いている。ポリポリの話はさておきチョコの話。チョコレートが急に値上がりしだした。去年からいろんなものの値上がりラッシュだが、チョコの上げ幅がすごい。「チョコレート 原料のカカオ豆が 採れなくなってきているらしい」と聞いた。

◎カカオ：収穫量が30～40%減少している。カカオは気温が27度以上、湿度70～100%、降水量2000mm以上の限られた地域、西アフリカのコートジボアールやガーナが生産国。気候変動のせいで、干ばつ、大雨、病害虫、病気、などが原因らしい。「カカオの2050年問題：カカオの木が絶滅するのでは」

◎朝、起きた時は雨が降っていたが、天気予報ではまもなく雨雲が無くなるということだ。登山道を歩き始めたが、地面がチラリと濡れている程度で、エンヤコラ快適に登っていく。空はグレーっぽい色に覆われ、なんだか日本海側の空模様を思わせる感じである。風は冷たい、ニット帽の上にジャンパーのフードを被り歩いている。手袋は外しているが手を袖のなかにいれ暖を取っている。500Mあたりのところで、隅の方にちらりと雪が残っていた、何日か前に降ったものが残っていた。標高の高い冬山では、ちょっとでも手袋をはずすと冷たさが痛い、「なにかを出したい 写真を写したいとカメラを触る」そんなことで手袋を取るとジンジン痛み、慌てて手袋をはめ、その上からオーバー手袋をして10分ほど我慢していると、手がほんわかしてくるという冷たさだが、大阪の500M級ではそこまで寒くない。

◎両側が落ち込んだ尾根道、道の端の土が流れ落ちないように、養生をしてくれているので、まだまだしっかりした登山道、ここらあたりの山道はお気に入りの道である。これがもっと切り立ち、崖が深ければ、オットト、怖いねえということになる。このあたりは樹林帯の山、針葉樹もたくさんあるが、雑木が好き勝手に生えている部分もある。雑木なんて失礼な言い方でゴメンだけど、雑木林の山は好きだねえ。

◎12時頃につべんに着いた。「温度計は・・？」「5度 もっと低いかなと思ったが・・」上にはうっすらお陽さんが出ているが空の半分がどす黒い、「雪でも降っているのかな」という暗さ、弁当を開け、クリームスープの粉をカップに、その中にテルモスの湯を入れ何度もかきまぜた。「お これはなかなかうまい 暖かい ヌードルよりはいいかな」ゆっくり飯を食った。今日は誰もいない、誰とも会わないのは珍しい、と、一組の男女、続いてもう一組、そしてソロのあんちゃん、皆さんランの恰好をしている。最近では山に登っても、トレイルランの方が多い。山を小走りで走っていくスタイルで、ランニングシューズに近い靴（裏底は凸凹）、小さいザック、薄っぺらい上下のウェア、そんな恰好で標高の高いアルプスでも駆け抜ける。彼らのことは、「迷惑な奴らだ」と思うけど、そのスタイルが増えてきていることにはあらがえないね。

◎飯を食い終わって、下りだした。10分ほど行くとポツリ白い粒が、「おお 雪か アラレか」と思っていると、急に勢いよく降ってきた、径2.3mmの白い粒がはらはら降ってきた。そのはらはらが勢いを増し、はらはらはらはらと降る。雪の降り始めとはこういうものか、今まで雪の無かった地面が石灰を撒いたように白くなっていく。土色の地面がちょっと白く、またちょっと白く、徐々に地面が見えなくなってきた、白色に覆いつくされた、これには感動したね。ICレコーダーを聞きながら、パチパチパチ、上着にあたる雪粒の音が聞こえる。1時間ほど下ったところで白いものはなくなった。オレが下り高度を下げたのか、雪が無くなり小雨模様、本山寺の舗装参道を歩きだしたころには地面が多少濡れているだけだった。

◎神峰山寺から本山寺までの斜面の舗装道路で自転車を押して登る青年に2回会った。「押すな 乗って 漕げ」とは大きな声で言えないが・・。自転車に乗る人たちは、坂道登りは、「降りるな 漕げ」というらしいが、オレは、自転車も、ランも、弱いねえ。オレは山の上り下り、歩くのが好きだねえ。

◎この山はいつも通る道、坊村にも、木地山にも、遠敷峠にも通る道の途中にあるのは知っていたが、行ったことがなかった。かつて、行こうといわれたことがなかった。「皆子山：みなごやま：に行ってみよう」と声は聞いたが、行ったことがなかったのでなんだか不安だった。今回、掛け声をかけてくれた人がいて5人で行くことになった。

◎“平”というバス停の横の空き地が5.6台停められる駐車場があり、500円を入れる箱がある。ここは知っているぞという骨董店があり“杣の道”と書いてある。若いころにこのあたりから比良の方に登ったが、どこをどう行ったか覚えていない、雪の比良を上の方まで歩いていったかな。「ここだ ここだ 駐車場は あれれ 満車かな」少し行き過ぎて、歩いて見に行くと端っこが一台なんとか滑り込めそう。「おおい 大丈夫だ」と車に合図を送り、何度か切り返して駐車できた。

◎9:40 出発した。昔の澤山グループを思い出す。駐車場に着くと、靴を履き替えスパッツを着け、ザックの中身を点検して、「さあ 行こう」その時と同じことをしている。靴は何足も変わっているが、作業は同じ、ただ違っているのは、二年目のスマホ、中のアプリをスタートさせた。オレは“ジオグラフィカ”というものを使っている。前日にそれを開けて、行く山の地図を登山口から頂上まで滑らせていく、右へ左へ滑らせ、スマホ君に覚えさせておく。歩き出す前にボタンを押すと、矢印が山のとっぺんまで付き合ってくれる。「これがあれば 地図が要らねえよ」というように、ほとんどの山を登る方がこれらの山アプリを利用し、紙の地図やコンパスを持っている人は少なくなってきた。

◎歩き出した、民家の屋根には10センチ足らずの雪が真っ白、まわりの樹々も雪をかぶっている。横の葛川の橋を渡り細い道、民家が寺が墓が、そこが登山口のような。ズボ足で登っていくエンヤコラ斜面を登っていく。

◎1時間ほど登ってきた。横に比良の山なみが見え、上の方はスキー場もあるので真っ白だ。今日の寒さでも雪製造機を回しているのかな。このあたりは幹の太さが30センチぐらいのひょろりとした樹々が林立、落葉して細い枝だけなのでまわりがよく見える、琵琶湖も見える。少し先は針葉樹林帯で山全体が薄暗く、あそこに入ると行く冷気が一段と増す。手袋が要るような要らないような冷気、4枚のシャツで登っている。

◎ちょうど12時頃にとっぺんに着いた。「ここかな いやいや もうちょっと右の方 標識がないね」ここは大きな標識は無く杭に近い棒が立っているだけのとっぺんである。このあたり1M近く積もっているかな、太ももまでズボりと雪の中に沈んでいく。空は青の青のまっさお、「オレが一番 長老か」と思いながらもジジババ5人、「エンジェル して」「なにそれ」「雪の上に 仰向けにひっくり返って 手足を バタバタ」「ちがう違う それじゃ 痙攣」歳に似合わずはしゃいでいる。エンジェルとは、雪の上に大の字に仰向けにひっくり返って、手足で雪を掻くと雪の上にエンジェル模様が浮き上がるということである、これは知らなかった。

◎「さ めし 少し横のひだまり 日向ぼっこしながら お弁当にしましょう」いつも雪山の弁当は大変である。風が吹き寒い中、座るところもなく、立ったまま弁当箱を開け、そそくさと喰って、「さあ 行こう」ということが多かった。そのてん最近湯を入れて簡単に作れるヌードルやらスープやらなんでもある。テルモスに湯を入れて持って来れば暖かいものが食べられる。オレはお手製の弁当とヌードル、持ってきた湯を入れ弁当を食った。皆さんも、ヌードルやうどんやみそ汁、それにおにぎりやパンなどを喰っておられる。雪の上にザックを倒しその上に腰掛けて食べている。それぞれ持ってきたコーヒーを飲んでいる、チョコレートがまわってくる。30分ほどゆっくり食べ話した。

◎「帰りは ワカン 着けるよ」オレは6本爪の簡易アイゼンを登りの途中で着けそのままにしている。ワカンは平らなところで威力を発揮するが、斜面では役に立たないと思っていた。「なにいつてるの ワカンは 下りの斜面で しっかり止まるよ」とベテランのMさん。歩きを見ていたが、なるほどと納得。ただ、ワカンもアイゼンも装着に時間がかかる、ワカンも持ってきていたが、アイゼンからワカンに履き替える気もなかった。下り、雪がだれだしアイゼンを外したが、「しまった まだ 急斜面があった」その急斜面、10分20分、慎重に下った。南茨木でひらってもらい、南茨木で降ろしてもらい、らくちんな行き帰りであった。

◎9：15 北小松駅を出発。同道は真鍋ひろみさん、山岡ノンちゃんの女性お二人、もう一方は体調不良で来られなかった。今日は冷える、暖かい気候が平年なみに戻り寒くなると天気予報士が言っていたが暖かい。ダウンと防寒具をザックにしまいシャツの4枚重ねでちょうどいい、背中にお陽さんがあたり暖かいぐらいだ。駅前にはまったく乾いている雪や氷のかけらも見えない。湖西線に乗って比叡山や比良山のとっぺんはさすがに雪で白いが、平地も山の中腹も雪がない。昨日教えてもらったが、「冬うらら」は俳句の季語でほんわか陽の照った冬の暖かさを表すそうだ。ただの「うらら」これは春の季語だそうだ。

◎10：25 涼峠を出発。壮年男女の4人が先に出発した。小松駅は乗降客も少なく、何度もこの駅で降り階段を下ってベンチで登山の用意をするが、ほとんど人がいない。いても2.3人である。ところが今日は珍しく15人ぐらいの熟年グループ登山姿が居たが以後会うことはなかった。「まったく雪がないねえ」と話していると、道の横の斜面に白いものが始まった。いくら温かいとはいえ冬の比良に雪が無いことはない、ヤケオ山の手前付近の斜面、雪が深ければラッセルでてこずり、去年のように釈迦岳まで行けず撤退になる可能性が強いかないと思いつつエンヤコラである。

◎40 歳代の4人組、抜きつ抜かれつながら急斜面では俄然早い、我々ジジババはよっこらしよと登っていく。「われわれは ここまでです ピストンで引返します」「釈迦まで先導してよ」と笑いながら別れた。ヤケオからしばらく来た所、「去年 ここらあたりで引き返した場所かな」もうほとんど登りはない、1時間前だけれど釈迦には1時過ぎに到着しそう。今日は雪の量が少ない、雪が固く締まっているので足を乗せてもズボリと潜る回数も少なかった。ラッセルする場所もほとんどなかったが、深い雪にピッケルを突き刺し、一歩二歩と登っていった、へ～へ～は～は～である。ヤケオの手前で若い人が2.3人下ってきた。「風がきつく これ以上いけません」

◎釈迦手前でいささかばててきた。「目の前のピークが てっぺんで ありますよう もうひと山 向こうだと嫌だねえ」なんて呟きながら、ヒーヒーである。

◎てっぺんを通り過ぎて直下で弁当を広げた。今日は風がきつく、少し下った陽だまりで腰を下ろした。横に熟年男3人組が弁当を終えられた。「イン谷から登って 北小松に下る」だそうで、すぐに出発された。ヌードルに湯を入れおにぎりをパクリ、「暖かい おにぎり いかが」カイロで温めたおにぎりをいただきますそれを、次に持参のモノ、次にヌードルをすすって腹が大きくなった。

◎3：30 イン谷口の元ケーブル駅のところまでたどり着いた。冬の今の季節、縦走は無理かなと覚悟してきたが、超えることができた、良かった、感激、素晴らしい、喝采である。

◎下ってきて舗装道路を歩き出した。「あ 車がある 神戸ナンバーだ」「工事関係者？ 保守点検？」「車があるということは 道が開通したということ じゃないの」「一台だけだしねエ」去年の夏前、ひとりが蛭の被害に遭った日、今日の3人で葛川側の柵生から登って武奈を抜けてここに来た時、車が一台もなかった。「え？なんで？」「土砂崩れがあったようだ」「中に車が 入ってなくて よかったね 道が一本あるだけ 出られないもんね」土砂崩れの工事はすぐに終わって、すぐに通れるものと思っていたが半年以上もかかったようだ。下に歩いていくと数台の車が止まっていた。細い地道を駅の方に歩いていくと、左の道路の上の斜面が、人工的な白いもので覆われていた。コンクリートなのか、養生シートなのかわからないが、工事が終わり道路が開通したようだ、めでたし、ありがたし、車で来られる。

◎帰りの電車の中で思ったものだが、「今日も この山 登れた しみじみ」である。最初、多分誰かに連れられてこのルートを知った。50歳ころの元氣盛りに、湖西線北小松駅から釈迦岳、北比良峠、武奈ヶ岳、金糞峠、イン谷口、比良駅と歩いた。そのあと何度も来た覚えがあるが、10年ぐらい前から武奈ヶ岳経由をやめ、5年ぐらい前から北比良峠経由もやめ、最近はおっぱら釈迦岳からケーブル駅を通過してイン谷口に下っている。3年ぐらい前からバスがあればバスに乗って帰るようにしている。「このコースは オレの 定点コース」なっている。「今回も 登れた 体力がまだまだ大丈夫 めでたい」である。



祭天狗僧参内裏現被追語 20-4 <てんぐを まつる そう だいに まいりて あらには おはるる >

◎第二十巻は天狗の話が出てくる。第一では天竺から飛来した天狗、第三は天狗の失敗談。鬼、天狗、狐、多彩に出てくるが、同じような物であり、まったく違う物であり、楽しませてくれる。当時これらを本気で信じていたんだろうね。ここに修験を積んだ僧や聖人が出てきて念じる。当時の高僧やらお聖人様は今の僧とは違うようで、占い師であり、悪魔祓いであり、権力者、なれど、天皇のお召があれば、「行かなきゃなるまい」「ありがたいお召だ」とそそくさと御前に参るのだ。

◎今は昔、円融天皇が長らく御病気であらせられたので、様々な祈祷が行われた。とりわけ物の怪の仕業ということで、当時、験力に優れていると評判の高い僧を召し得るかぎり召し寄せて御加持を試みたが、まったくその効き目がなかった。

そこで天皇はひどく恐れておられたが、ある人がこう奏上した。「東大寺の南に高山（かぐやま）という山がございます その山に仏道修行をしながら長い間住んでいる聖人がおると申します 永年の修行の功が積もり加持の力で野を走る獣を止まらせ 空を飛ぶ鳥を落とすということです この者を召して御加持をなさったら 必ずやそのしるしがございましょう」天皇はそれをお聞きになり、さっそく召し寄せるよう仰せ下されたので、使いをやって召すと、その使いと一緒に参内する。その参内の道すがら、奈良から宇治までは、空からさまざまな花を降らせながら来るので、これを見る人々はこの上なく尊んだ。ところが、宇治から北では花の降ることもなかったそうだ。

いよいよ内裏に着いたので、御前に召して、御加持をつとめたが、その後ほどなくご病気がかき拭うように平癒なさった。

◎ここまでは、天下の高僧たちが加持祈祷をしていた。高僧たちがぼやく。「わたしらは 仏に頼みをおかけして 仏法を修業し みな長年にわたって励んできたものばかり それが心を込めて 連日御加持に奉仕していても 少しもしるしが見えないのに ああもたちどころに 功験を現し得たとは あの法師はいったい・・・ 合点がいかぬ」

高僧たちは、この僧が座しているところに向かい、心を合わせて渾身に二時間ほど加持をした。高僧たちが心を込めて加持すると、突如、この僧が几帳の外にあおむけに投げ出された。「どうぞお助けください 永年高山に住み もっぱら天狗を祭り祈ってきた 懲りました お助けを」

◎今昔氏：こんな天狗なぞを祭る者は、一時は霊験あらたかなようで、すぐに化けの皮が剥がれる。

◎加持祈祷：

病気や災難から身を護るために、神仏に祈る。

真言密教において、仏の慈悲神を感じ取り、願い事をかなえるための祈祷。

祭壇を組んで火を焚き、護摩木をくべ真言を唱える。

平安中期、皇室から庶民に至るまで、国家の大事から庶民の些事まで総べて加持祈祷によって解決しようとする風潮が高まった。天皇個人の祈祷を行うのは、延暦寺、園城寺、東寺などの密教寺院の高僧が選任された。陰陽師の呪法が仏僧の加持祈祷と目的が重複するため、陰陽師が占いで神気を見た場合には、仏僧が辞退することもあった。

◎オレが若いころ、半世紀前には占いや祈祷による事件が新聞ざたになった。素人祈祷師が、「狐憑きを治す」というようなことで、病気の人を押し込め長時間祈祷をして、肉体的に攻撃して死亡に至った、ということが載っていた。「こんなことが こんな風習が まだ あるのか」当時思ったものだ。

◎よく登るポンポン山の麓の神峰山寺、中腹にある本山寺、この二つの寺も護摩を焚いている。大嶺奥駈道の所々に、修験者による祈祷の場所がある。現代でも加持祈祷はなお盛んにおこなわれている。